

論文内容の要旨

辻 香代

本論文では、外国語（英語）ライティング方略としての母語使用に着目し、国内外の実証的研究、及び、それらを礎に構築されたライティングプロセス・モデルを考察し、母語使用を取り入れるべき認知的プロセスを探究した。その上で、国内のプロセスを重視した英語ライティング授業の実践例を考察し、得られた知見や示唆に基づき、英語ライティング授業を考案・実践し、日本の英語教育における新たな視座を得ることを目的とした。

第 1 章では、国際情勢、社会経済状況、大学制度等からの影響を受け、日本の大学英語教育を取り巻く環境がどのように変化したのかを概観した。具体的には、英語教育に対する認識が変容し、行政主導の英語教育政策が矢継ぎ早に提唱されるようになり、英語教育がどのような変遷を経てきたのか、英語ライティング教育が組織的にどのように動いたのか等を概観した。

実践的な英語コミュニケーション能力の育成を意識した英語教育が展開されるようになり、その中で、英語による文章コミュニケーション能力の育成にも重点が置かれるようになった。初年次教育やライティングセンターとの連携が図られる等、学部・学科における英語教育の枠を超えて、組織的に「書くこと」が支援され、その状況は画期的に改善されてきたにも関わらず、必ずしも大学生の英語ライティング力が向上したわけではないことが、文部科学省や各種英語検定試験の実施団体等が提示する資料・事実情報より把握できた。「論理的に文章を書く力」や「外国語の力」が課題として浮き彫りとなり（中央教育審議会, 2012）、抜本的な英語教育改革の必要性が示された。英語の授業は全て英語で行う傾向が強まる中で、高次の思考を操作することのできる母語を礎とした英語ライティング教育に向き合う必要があるのではないかと考え、外国語ライティング方略としての「母語使用」に着目し、本論文の研究に至った。

第 2 章では、日本における外国語（英語）教育に示唆を与えるため、国内外の母語使用に関する先行研究を通じて、外国語教育における母語使用の有効性を調査した。具体的には、母語使用の利益を享受する学習者の外国語レベル、母語使用が効果的なライティング・タスク、母語使用を促すべき用途等の観点

から事例を考察した。その結果、全レベルの学習者に母語使用の意義があること、学習者に馴染みの低いタスクの達成に母語使用が寄与すること、学習者の外国語レベルにより母語使用の用途が異なることが示された。本研究の対象となる初級・中級英語学習者には、認知負荷がかかるタスクにおいて、英語テキスト上の包括的要素（文章の構成・内容等）と局所的箇所（各センテンスの可読性）の発展を志向した「母語使用」が有益であることが示唆された。また、これら2点の発展を母語で目指す活動は、「母語の情報を英語に直す活動」とは別々に実施する必要があるだろう。先行研究の事例より、両活動を一纏めに実行すれば、後者に注意が払われ、前者が疎かになることが把握できた。次に、初級・中級英語学習者が母語使用を取り入れるべき認知的プロセスを解明するため、「計画し、それを文章化し、推敲する」というライティングの普遍的なプロセスに焦点を当て、各プロセスにおける母語使用の教育的効果を調査した。結果、書く内容を計画する活動（「計画」）から英語に文章化する活動（「英語による文章化」）へのトランジションに認知負荷がかかることが明らかとなり、両プロセスをより円滑に繋げる認知的プロセス、即ち、母語による文章化（以後、L1文章化と称する）の必要性が示唆された。以上を踏まえ、「L1文章化」が英語テキスト・クオリティの発展に寄与する可能性に着眼し、4プロセス（計画し、母語で文章化し、それを英語に文章化し、推敲する）を有する「初級・中級者向けの英語ライティングプロセス・仮モデル」を構築した。

第3章では、先章で得られた知見を出発点とし、本研究の位置付けを行った。まずは、国内におけるプロセス重視の英語ライティング授業を考察し、実践された言語活動、及び、注力されたプロセスとあまり注力されなかったプロセスを探究した。次に、各事例で行われた言語活動を先章の4プロセスに分類した。その結果、「L1文章化」があまり検討されてこなかった学習プロセスであることが確認された。その要因として、時間制限のある学習者のライティングプロセスを探索したモデルの影響と第二言語習得の研究・教育領域における母語使用への懐疑的な見方が挙げられる。国内の実践で「L1文章化」の認知プロセスに軸足が置かれてこなかったことが示されたが、先章の知見に照射すれば、「L1文章化」が英語テキスト上の包括的要素と局所的箇所の発展に貢献する可能性は十分にあると考えられた。ゆえに、英語テキストの発展を志向した「L1

文章化」の有効性を検証することとした。

次章より、「逆向き設計」論（西岡, 2008; ウィギンズ・マクタイ, 2012）を参考に、英語ライティング教育で実践する授業を構築した。具体的には、第4章で、学習成果の実現を志向した「L1 文章化」における学習目標を設定し、第5章で、学習成果を評価する基準を決定し、第6章で、教育・学習方法と学習の進め方等を決定した。

第4章では、学習成果の実現を志向した「L1 文章化」の学習目標を決定した。先行研究で初級・中級英語学習者が十分な注意を払うことができないと示された部分、英語テキスト上の包括的要素と局所的箇所の発展が学習成果である。学習成果を確実に獲得するため、まずは、文部科学省（2011）やグローバル人材育成推進会議の提言（2012）、及び、英語教育改善のための英語力調査（文部科学省, 2016, 2018）等の報告を踏まえた上で、調査対象者に課すべきライティング・タスクを議論型（意見展開型）のエッセイとした。対象タスクにおける包括的要素の発展を目指し、母語テキスト上で、各モジュール（主張・理由・根拠・結論）間の整合性を確保すること、及び、各モジュールの内容を具体化させることを到達目標とした。また、局所的箇所が発展するよう、翻訳者の頭の中でおこなわれる和文英訳プロセスを基盤に開発が進められている機械翻訳（machine translation : MT）の言語処理プロセスに着眼し、MT活用が円滑に進むよう提案された原言語の表現法、具体的には、制限用語（Controlled Language : CL）を礎として学習の観点を抽出した。

第5章では、初級・中級英語学習者が育むべき要素を反映させた評価観点と観点の説明を設定し、尺度毎に評価基準を記したルーブリックを開発した。モジュール・ライティング技法（藤代, 2009, 2011）を土台とし、言語を超えた普遍的要素である「論理性（各モジュール間の論証性）」と「明示性（各モジュール情報の具体性）」を設定し、6段階の尺度毎にそれぞれの評価基準を示した。また、英語テキスト評価指標であることから、「英語（英語センテンスの構築）」の観点を設け、6尺度の評価基準を提示した。本ルーブリックの妥当性と信頼性を測定した結果、評価指標としての内容は妥当であり、測定すべき事項が測定できたこと、複数名の評価者が実施した測定数値に再現性があること等が確認できた。ゆえに、学習者の課題を考慮した評価観点や操作的に定義した観

の説明、及び、6段階の尺度と各尺度における評価基準の記述が適切であることが明らかとなり、本ルーブリックの教育実践における実用可能性が示された。

第6章では、文章産出過程に深く関与するメタ認知（崎濱, 2003）を高めるという観点から教育・学習方法（教員関与、協働活動、個人活動）を決定し、認知心理学、脳科学、第二言語習得の研究領域等から見た各方法が学習者の学びに与える利点を概観した。また、各方法の利点が最大限に活かされるよう、ディビット・メルルが提唱した **Instructional Design (ID)** の第一原理（鈴木・市川・根本, 2016）の5要素（問題の提示、活性化、例示、応用、統合）にそれぞれの教育・学習方法を組み入れ、学習内容が実践に活かされるような授業の進め方を決定したうえで、文章の包括的要素、及び、局所的箇所に関する言語活動の詳細を決定した。

第7章は、事前調査の位置付けである。英語テキスト・クオリティに対する「L1文章化」の有効性に関する調査に先駆け、学習者が「L1文章化」の言語活動、即ち、「母語文章形成活動」をどのように認識するのかを調査した。その結果、9割を超える調査参加者が、母語文章形成活動を「より良い英語テキストの産出に貢献する活動」として肯定的に捉えたことが分かった。多くの学習者が、本活動を通じ、文章の包括的要素をより深く考えられるようになったと認識しており、メタ認知的な活動をより円滑に進められたと感じていることが示された。具体的には、論理を見直しやすい、間違いを発見しやすい等、文章の包括的要素に関する検討・評価がより促進されたという認識を持ったことが報告され、認知負荷の軽減とメタ認知の活性化により利益を享受できたことを学習者自身が実感していることが示された。学習者らの肯定的な認識が得られた一方で、母語を英語へと変換する作業が円滑に進まなかったという事実が明らかになった。これは、先行研究のレビューにより得た見解と合致する。学習者が直面した課題は、局所的箇所を整える「L1文章化」の必要性を顕著に示したものと捉えられた。

第8章は、文章の包括的要素に焦点を合わせた「L1文章化」の教育的効果を調査した。具体的には、「母語文章形成活動」が英語テキスト・クオリティに与える効果を、実験群（当該活動有り）と対照群（当該活動無し）の比較により検証した。実験群は「初級・中級者向けの英語ライティングプロセス・仮モデ

ル」に準拠し、英語テキストを完成させた。それに対し、実験群には「L1 文章化」を省いたライティング・プロセスを適用した。活動前後の英語テキストにおける変容の傾向を全体的に把握するため、参加者内要因を英語テキスト、参加者間要因を「L1 文章化」の有無とする 2 要因の分散分析を行った。統計的な比較検証の結果、英語テキスト上の包括的要素の発展に対する「L1 文章化」の有効性が示された。また、実験群に的を絞った英語テキスト考察により、英語力が相対的に低い場合には、母語テキスト上の発展が英語テキストに円滑に移転されないという課題も示された。

第 9 章は、文章の包括的要素を整える「L1 文章化」を効率的に進める方略を使用した場合、英語テキスト・クオリティに対する効果はより高まるのであろうかという問いを出発点とした。モジュールライティング技法（藤代, 2009, 2011）を基にライティング枠組みを構築し、「L1 文章化」の活動に導入し、英語テキスト・クオリティに影響を与えるのかどうかを検証した。具体的には、本枠組み使用の有無により、調査対象者を実験群と対照群に分け、それぞれの群が実施する「L1 文章化」が英語テキスト・クオリティに与える影響を比較した。英語テキスト評価とライティング枠組みの有無における 2 要因分散分析の結果、本枠組みの活用は、学習者の意識を「まとまりのある文章の最小単位（主張、理由、根拠、結論）」に向けさせ、学習者が各モジュールの相互関係や内容の妥当性を検討することに貢献したことが示された。また、母語テキスト上で文章の軸を論理的に整えてから、特定の情報を詳述するという段取りを付ける重要性が明らかになった。本枠組みは、「母語文章形成活動」をサポートするライティングの枠組みが英語テキスト・クオリティの発展に寄与することを示した一例であると言えよう。

第 10 章は、文章の局所的箇所にも焦点を合わせた「L1 文章化」の教育的効果、即ち、英語センテンスの可読性に与える影響を調査した。機械翻訳のプリエディット作業の基準となる制限言語（CL）という表現法に着目し、CL 表現法を基盤として母語センテンスを整える活動を考案した。母語パラフレーズ活動が英語センテンスの可読性に与える影響について、実験群（当該活動有り）と対照群（当該活動無し）の比較による検証を行った。英語テキスト評価と母語パラフレーズの有無における 2 要因分散分析によれば、当該活動の有効

性はあまり認められなかった。対照群は、可読性の低い英語センテンスを構築し直すプロセスにおいて、英語センテンスの意図を母語で把握し直し、CL留意事項を踏まえながら真意を母語で整え直した後、英語センテンスの再構築に至っていたことが明らかとなり、初級・中級者には母語パラフレーズ介入が不可避であることが示された。また、群を問わず、母語パラフレーズを実施した学習者の活動前後における英語センテンスを質的に考察したところ、CL留意事項を基盤とした「学び」が英語センテンスの可読性を高めることに繋がったことが示され、活動に一定の重要性が認められた。機械翻訳のCL表現法は、母語パラフレーズ活動に関する有益な示唆を含んでいると捉えられた。

第11章では、論理的手続きによって進められた本研究から得られた知見を整理した。これまで、「L1文章化」の言語活動（母語文章形成活動と母語パラフレーズ活動）を通じ、学習者は、英語テキスト上の包括的要素と局所的箇所の発展を達成することができるだろうという仮説を立て、各活動が学習成果に与える影響を調査した。一連の調査結果を踏まえ、「L1文章化」は、文章の包括的要素、局所的箇所に関する十分な検討を可能とし、ひいては、英語テキストの発展に寄与する英語学習プロセスとして位置付けることができた。ゆえに、初級・中級英語学習者向けの英語ライティング・プロセスの一環に据える必要がある。「L1文章化 (Formulating in L1)」は、「文章の包括的要素を整えること」と「局所的箇所を整えること」を下位プロセスとし、「英語による文章化 (Translating from L1 to L2)」を志向した母語文章と母語センテンスを形成し、検討・評価し、修正するまでの一連の役割を内包することが望ましい。

最後に、本研究では、これまでの理論的・実証的研究より得られた課題や示唆を踏まえたうえで、母語使用を取り入れるべきライティング・プロセスを決定し、母語を礎とした外国語ライティング教育を考案・実践し、実証的な検証をおこなってきた。その最たるものが、「L1文章化」の英語テキスト・クオリティに与える影響を包括的要素と局所的箇所の観点から検証し、英語ライティング・プロセスの一環として担う役割が大きいことを明らかにしたことである。本論文の意義は、初級・中級英語学習者の英語による文章発信力を鍛えるために、母語を礎とした英語ライティング教育への布石を築いたことにあると言えよう。